

令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況について

令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況と防除対策をまとめました。次作に向けた対応の参考にしてください。

【被害状況】

病害では、紫斑病、べと病の被害粒率は平年並、ウイルス病の被害粒率は平年よりやや高くなりました。虫害では、吸実性カメムシ類、マメシクイガによる被害粒率は平年並でした。

表 令和5年産大豆子実の主要病害虫による被害状況

病害虫	被害粒率 (%)			発生地点率 (%)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
紫斑病	0.3	1.6	8-9	46	60	7-9
べと病	1.6	4.4	8	85	62	2-4
ウイルス病	1.9	0.9	3	69	30	2
吸実性カメムシ類	2.5	2.7	6	100	79	1-2
マメシクイガ	2.0	2.2	6	62	53	3-5

1) 平年：過去10年間（平成25～令和4年）の値の平均値。ただし、べと病は平成29年を除外した過去10年間（平成24～令和4年）の値の平均値

2) 順位：本年を含む過去11年間における本年値の順位。ただし、べと病は平成29年を除外した本年を含む過去11年間（本年および平成24～令和4年）における本年値の順位。（8-9は8位から9位まで同じ数字であることを示す）

【調査圃場】 県内13地点の大豆圃場（里のほほえみ9圃場、納豆小粒4圃場）

【調査方法】 1圃場あたり10株の上位20莢程度（合計200莢程度）を採取し、子実の被害を目視で調査した。

【採取時期】 令和5年10月第4、5半旬、11月1半旬

【防除対策】

＜紫斑病＞

- ① 茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 防除適期は開花期の20日後頃である。
- ④ 開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の30日後に追加防除を行う。2回目の防除を行う際は、1回目の薬剤とFRACコードの異なる薬剤を散布する。
- ⑤ 収穫が遅れると発生が多くなるので、適期に収穫する。

＜べと病＞

- ① 茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 密植を避け、風通しを良くする。
- ④ 防除適期は開花期～子実肥大期である。
- ⑤ 発病程度は品種間差があり、「里のほほえみ」は「タチナガハ」に比べて発病しやすい傾向にあるので、発病初期からの薬剤防除を徹底する。

＜ウイルス病＞

- ① 種子更新を行う。
- ② 生育初期にウイルス病に感染すると被害が大きくなることから、媒介虫であるアブラムシ類を早期に防除する。
- ③ 発病株は早い時期に抜き取り、処分する。

＜吸実性カメムシ類＞

- ① 薬剤防除は莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。
- ② 幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。

＜マメシクイガ＞

- ① 成虫の移動性が低く発生圃場で繁殖・越冬するので、連作を避ける。
- ② 防除適期は産卵最盛期～その約10日後であり、大豆の生育ステージとしては、莢伸長終期～子実肥大初期頃にあたる。